

## リンダ・アンダーソン(Linda Anderson) 日本訪問記

### アンダーソン夫妻との出会い

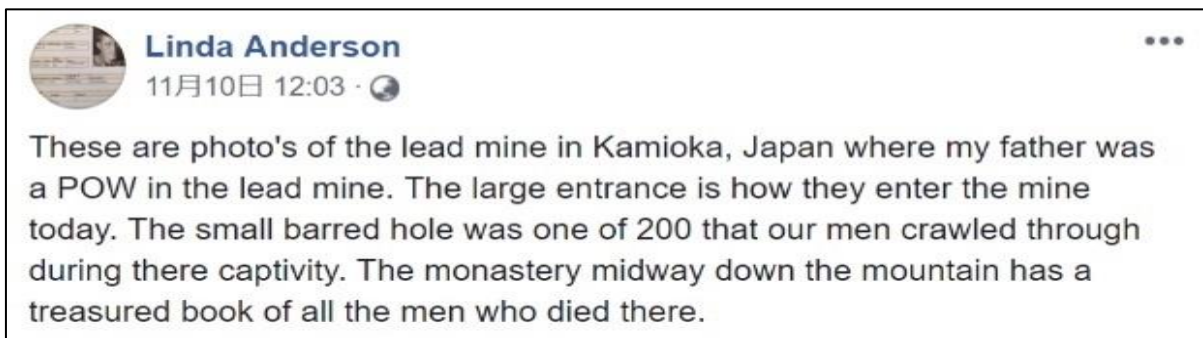
Linda Anderson(リンダ・アンダーソン)とは、6、7年前、ADBC(米軍バターン・コレヒドール防衛兵の会)の総会で親しくなった。リンダは洋服のセンスも良くて、お化粧もちゃんとしているが、極端に視野が狭いため、いつも車椅子で、夫のデビッド(David=Dave)が甲斐甲斐しく付き添っていた。今年5月の総会はニューメキシコ州のアルバカーキだったが、ゆっくり話す間もなかった。帰り際に短い会話を交わした時、リンダの父親は奉天から神岡に送られた捕虜だったということを初めて知った。それまで何度も顔を合わせていながら、一切聞き取りもしていないことを酷く後悔した。奉天の捕虜ということで私が10年来親しくしているRalf Griffith(ラルフ・グリフィス)とMary(メアリー)夫妻と親しくなり、彼らから紹介されて、何度か食事を一緒にしたりして、背景を聞いたりする前に旧知の間柄のようになってしまって、ついつい時間が経ってしまったということに気づいた。



### 外務省招待で来日

9月になってからリンダ夫妻が外務省招待で来日するということが判って、私はすぐにメールを送った。きっと一日くらい夕食がフリーの日があるはずなので、その時ホテルまで会いに行くこと約束した。今回事前に送られてきた、ADBCのメンバーのMindy Kotler(ミンディ・コトラー)のレポートを読むまで、リンダの父親の名前さえ知らなかった。到着の翌日10日が唯一東京で夕食は各自自由にとる日ということが判った。アメリカ各地からということで、人によっては国内便、国際便と乗り継いで、自宅を出てから30時間の長旅ということも十分考えられる。その上時差もある。70歳代の彼らにとっては疲労困憊状態でも不思議ないと思ったので、インタビューの時間をとってもらうことは憚られた。夕刻までには、その日の朝英連邦墓地の慰霊式に参加した伊吹さんから、私に会うのを楽しみにしていると伝言も貰っていた。夕刻高田さんと一緒にホテルで合流し、バーや一階のレストランで生い立ちや、父親のことを少し聞くことができた。リンダの父クラレンス・ネーバーズ(Clarence Neighbors)はリンダの母と彼女が3歳の時に離婚したため、16歳で再会するまで、父の記憶は一切なかったという。父はバターン死の行進を耐え、マニラの最悪の捕虜収容所も生き抜いて、典型的地獄船鳥取丸で釜山(プサン)に上陸後、旧満州の奉天(瀋陽)捕虜収容所に列車で送られ、そこに1年半居た後、岐阜県神岡の三井銅山に送られた。奉天(瀋陽)に居た間、何かの人体実験をされたことから、リンダの眼は遺伝的問題で視野狭窄を起こしていると、信じている風だった。

神岡訪問は感動的な体験であつたらしく、帰国後にはFacebookに神岡での写真をアップして、私や捕虜団体の関係者、同じく奉天から神岡に送られた捕虜の娘ジャニス・コーエン(Janiece Cohen)が反応して、しばらく連絡が途絶えていた私とまた繋がった。このFacebookのやりとりの一部を再現して、リンダの神岡訪問報告とする。



【リンダ・アンダーソン】

私の父が捕虜として働かされていた神岡銅山の写真です。大きな坑道は今現在の鉱山に入る入口で、柵をしてある小さな入口は父たちが囚われの身で働かされていたとき、這うようにして入った全部で 200 力所あった入口の一つです。山を下る途中にあったお寺にはこの地で亡くなった男たちの名前を全て書き記した名簿が大切に保管されていました。

A handwritten ledger with columns of Japanese text. The text is written in a cursive style and appears to be a record of names and dates.

(西里扶甬子)